

保護犬の世話 20年以上

理大付高野球部員と監督夫妻

岡山理科大付属高校(岡山市北区理大町)の野球部員と監督の早川宜広さん(50)夫妻が、同高の学生寮(同横井上)で20年以上にわたり、野犬や捨て犬だった犬を世話している。「弱い立場の動物に寄り添うことで、命の大切さを学んでほしい」「早川監督」との思いから、部員たちは精神的に不安定な時期もある犬との接し方を学び、受け継いできた。



学生寮から野球部の練習グラウンドまで約2キロの山道が部員と犬たちの散歩コースだ。グラウンドに着くと部員たちが練習に汗を流す間、犬たちは日陰でゆっくり休憩している。
寮で現在、飼っているのは生後7カ月から推定1歳までの6匹。それぞれ捨て犬だったのを保護したり、動物愛護団体が譲り受けたりした。名前は「理」「大」「優」「勝」「もあ」「球」で、野球部の勝利を願って監督夫妻が決めた。部員らがこうなった犬たちの世話をしていた犬を早川監督が助け、「リュウ」と名付けたのが始まりで、続いて左の後ろ

岡山理科大付属高の学生寮で暮らす犬と野球部員

心の傷思いやり、接し方工夫



日課になっている寮からグラウンドまでの散歩

足がない「チビ」を保護した。物病院(同一宮山崎)に、定期的に健康状態をチェックしてもらいながら育ててきた。部員全員でかわいがっているが、小屋の清掃などは「犬当番」の生徒が中心となっていく。犬に気に入られなければ、役目にはつけない。今は飼育経験があり、大好きな5人が担当している。「保護した犬は心に何らかの傷を負っていることがある。人間に慣れるまで、接し方を工夫する。」
「しないといけない」と早川監督を迎え入れた直後は小屋の中に閉じこもって出てこなかったり、頭の上に手をかざすだけで過剰に怖がりすることもある。部員たちは、犬の嫌がる行動を避け、徐々に心の距離を縮めていくよう心掛けていく。犬当番の2年田中颯太さんは「練習前には『頑張ってるよ』といつも声を掛ける。それぞれの性格を考えて世話をするのは大変だけど、一緒にいると優しい気持ちになれる」と話している。(矢根美紀子)



部員たちが練習に汗を流す横で一休みする犬たち